

大学生による幼児期の運動遊びプログラムの創作と 動画配信に関する考察

—体育演習科目の到達目標と学習意欲に着目して—

A study of the creation of early childhood exercise play programs and video distribution
by university students

— Focusing on objective and willingness to learn seminar course —

堀場 みのり HORIBA Minori

1. はじめに

2020年度、コロナウイルスの感染対策のため不要普及の外出の自粛により日常生活に様々な制限がかけられた。多くの大学は、オンライン授業を導入し、学生は学校に行くことなく、PCやタブレット端末から授業を受講することとなった。どこからでも受講できるメリットがある反面、教員や友人と直接やりとりできないことや、学生のネットワーク環境や周辺環境次第で学習意欲の継続を維持することが難しいという意見が多く聞かれている。

本研究の調査対象となった授業「子どもの運動遊び」は、幼稚園教諭・保育士・小学校教諭の免許取得を目指す教育系学部の専門科目であり、子どもを対象とした運動指導の基本的な知識を得ること、発達に応じた運動プログラムを提供できるようになることを到達目標とした実技科目である。具体的には、既存の運動プログラムの体験や創作、指導案を作成して学生同士で指導を行いお互いにフィードバックする内容である。将来、学生が教育者として子どもたちの様子に合わせて適切な指導を行うために、学生自身は実践を通じて感じたことや、他の学生の様子を観察すること、意見を交換することを重要として授業を行っていた。しかし、このような実践重視の演習科目においてもオンライン授業の導入、対面授業が認められた場合も人と人の接触や用具の共有を避けるなど、コロナウイルス感染拡大防止の対策が求められた。特にオンライン授業の期間には、家庭学習のため、体育館にあるような運動用具や器具は使用することはできないことから実践を通して学ぶことが難しくなった。そのような状況では、本来のカリキュラムを行うことはできず、到達目標を達成することが難しいどころか、その後の学習意欲の低下につながることを懸念した。

そこでコロナ禍の制限を全て逆手にとった新しい授業カリキュラムを試みることにした。そして、授業の中で学生に対して課題を出し、その内容と授業アンケートから、学生の到達目標に対する達成度合いと授業の満足度に対して調査することとした。

2. 新しい授業の試み

「子どもの運動遊び」の授業は、全15回のうち前半7回は同期型オンライン授業、後半8回が対面授業で実施された。到達目標は、元来通り、幼児期運動指針（文部科学省2018）から遊びの中から幼児期に経験する「基本的な動き（図1）」を理解し、環境や子どもたちの様子に対して臨機応変に提供できる指導スキルを身につけることとし、授業内容はコロ

新型コロナウイルス感染拡大防止対策に合わせ大幅に変更した。これまでは体育館にある器具や用具から、対象年齢を想定し、運動遊びを作成、発表を行い、学生同士で意見交換を行っていた。その方法から、まず、使用する用具は「家にある身近なモノ」から作成し、遊び方を考え、運動プログラムとして提案することとした。これはコロナ禍における子どもたちの制限された生活環境を想定するためである。運動施設や公園に外出しなくても可能な運動プログラムの提案を試みるとともに、学生の「基本の動き」に対する理解の評価に繋がるものとした。

次に、創作した運動プログラムの動画撮影・編集を行い、動画共有サイト Youtube にアップロードした。そして北名古屋市内の幼稚園、こども園、児童センターの先生に拡散し、意見やアドバイスの協力を求めた。この試みは、オンライン授業により減ってしまった学生間の意見交換を挽回したいと考えたことがきっかけである。回収された意見は学生にフィードバックを行なった。



(図1) 幼児期に経験する基本的な動きの例

3. 動画の内容

(1) 課題の指示

課題は4～5人のグループに分かれ、授業の時間内に企画・創作を行うこととした。学生には下記の条件を出した。

- ・体育館にある運動器具や用具を参考に、家にあるモノから運動遊びを引き出す用具の創作を行う。そして、その遊び方を考える。

安全性に気を配り、必要があれば注意事項を加えること。

- ・遊びの規則を定める場合、幼児が理解できるよう単純なルールにすること。

(2) 用具の創作

動画はコロナにより運動不足の不安がある家庭に対して、幼児期に必要な運動の説明と運動プログラムの紹介を行う内容にまとめることとした。

学生が創作した運動プログラムは下記の内容である。写真は、最終的に配信された動画をもとに添付したものである。

① 鈴付きゴム跳び (写真1)

ゴム跳びのゴムに鈴をつけ、そのゴムを跳び越す遊び。ゴムに当たってしまうと鈴がなる仕組みを加えた。



写真1 鈴付きゴム跳び

② お菓子キャッチ (写真2)

ゴム跳びのゴムにお菓子のイラストを飾った。大人がゴムを振り、子どもがお菓子をキャッチする遊び。



写真2 お菓子キャッチ

③ゴム操作競争（写真3）

両腕を横に広げ、前後に回す。そのとき、ゴムを腕に巻きつけ、解く動きとする。2人で競争し早く完了した方が勝ちという遊び。

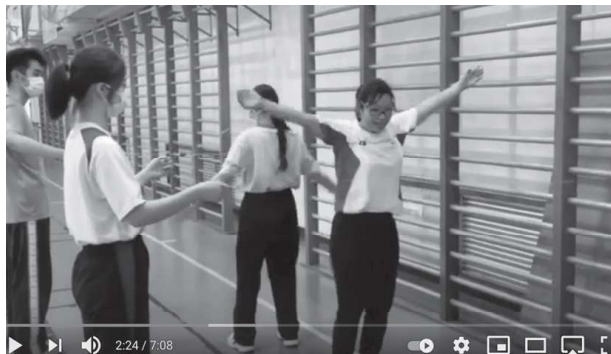


写真3 ゴム操作競争

④新聞紙ボール運び（写真4）

2つの箱を間隔をあけて置く。その中間に同じ数ずつ用意した2色の新聞紙ボールを置く。「よーいどん」で箱の中に新聞紙ボールを運び、早く完了したら勝ちという遊び。



写真4 新聞紙ボール運び

⑤バスタオルハードル（写真5）

バスタオルをねじり、細くした状態で地面に等間隔に並べる。走る、両足ジャンプ、四つ足歩きなどで踏まないように越える。



写真5 バスタオルハードル

⑥バスタオルしっぽ取り（写真6）

フェイスタオルをズボンに挟み、自分のしっぽを取られないよう逃げながら、おともだちのしっぽを取る。一番多くしっぽを持つ人が勝ちという遊び。



写真6 バスタオルしっぽ取り

⑦バスタオル縄跳び

バスタオルを結んでつなぎ、大縄のように使用する。



写真7 バスタオル縄跳び

⑧バスタオルキャッチボール（写真8）

バスタオルを丸めて固め、弾まない・当たっても痛くないボールとして遊ぶ。



写真8 バスタオルキャッチボール

⑨新聞紙の水族館トンネル (写真9)

新聞紙を広げ、長く繋げ、高さを固定しトンネルにする。トンネルの中に魚のイラストなどを飾り付けし、子どもたちがトンネル潜りを楽しむ遊びとした。



写真 新聞の水族館トンネル

(3) 学外教育者からの意見・アドバイスについて

幼稚園、こども園、子育て支援センターの先生方から回収した内容は、家にあるモノからの運動用具の創作という取り組みが「面白い」という意見や、学生が子どもたちのために熱心に運動プログラムを創作している姿に対してお褒めの言葉が多くみられた。また、創作した運動プログラムからアレンジの提案や、リスクに関する意見が挙げられた。実践してみたいという感想もあった。学生の創作した運動プログラムに対しての具体的な意見は表1にまとめた。(一部抜粋)

	いただいた意見・アドバイス(抜粋)
① 鈴付きゴム跳び	・ 分かりやすくて、楽しそう。
② お菓子キャッチ	・ ゴムを使った遊びは危険が伴うので、太さや色付けなどの工夫をすると良いと思った。 ・ クッキーをキャッチすることは、親が持てて楽しそう。
③ ゴム操作競争	首に巻きつかないか心配。 年齢を絞り、目を離さないことは大切。
④ 新聞紙ボール運び	・ ゲーム性があって楽しめる。 ・ あえて違う色のボールを混ぜると、参加していない子どもたちが外から「違うよ」と声をかけたりして盛り上がりそう。 ・ 箱の置き方やボールの作り方でルールや運動内容のアレンジができそう。
⑤ パスタオルハードル	・ 踏んで転ばないよう注意が必要。 ・ 身近で簡単に準備できて楽しそう。
⑥ パスタオルしっぽ取り	・ パスタオルは重くて長いので、リスクがありそう。 ・ 年少クラスでは、1(先生)対全員(子ども)が良い。
⑦ パスタオル縄跳び	・ 母親目線になると、場所を取り、つなげることが大変そう。
⑧ パスタオルキャッチボール	・ ボールが怖い子どもも挑戦できそう。 ・ 簡単に用意でき、部屋の中でもできるので良い。
⑨ 新聞紙の水族館トンネル	・ 違う運動により、力がつきそう！ ・ 暗い場所が苦手な子どもたちもチャレンジできそう。 ・ 横にカメラをおくなどして、子どもたちの様子を観察すると良い。

表1 運動プログラム別の意見・アドバイス

4. 結果と考察

①課題の到達目標の達成について

学生はグループワークにより、家にあるモノから運動遊びを引き出す用具の創作し、単純なルールのみで遊び方を考えることができたと評価した。そして、その運動内容はそれぞれ幼児期に経験したい「基本的な動き」を含むことができたと言えるだろう（表2）。安全性については、授業内の様子からリスクについて考える様子は見られたが、3（3）学外教育者の先生から指摘をいただく通り、運動プログラム作成時には考えが不十分であったといえる。しかし、具体的な指摘をいただくことにより、現状として「自分には予想できていないことがある」と理解したと考える。これは受講生が1～2年生で、実習等の経験がまだ少なく、現実の子どもたちの特性をまだ理解できていないことが原因と考える。

表2 考案した運動遊びと「基本的な動き」

運動遊び	基本的な動き	具体例
① 鈴付きゴム跳び	体を移動する動き	跳ぶ
② お菓子キャッチ	用具を創作す動き	獲る
③ ゴム操作競争	用具を創作す動き	巻き込む・おどく
④ 新聞紙ボール運び	体を移動する動き・用具を操作する動き	走る・運ぶ
⑤ バスタオルハードル	体を移動する動き・バランスをとる動き	走る・はねる等
⑥ バスタオルしっぽ取り	体を移動する動き・バランスをとる動き	走る・獲る
⑦ バスタオル縄跳び	体を移動する動き	跳ぶ
⑧ バスタオルキャッチボール	用具を操作する動き	投げる・獲る
⑨ 新聞紙の水族館トンネル	体を移動する動き	這う

②学生による授業の満足度評価

授業終了後、運動プログラムと動画制作及び授業全体について授業アンケートを行なった。

アンケート期間：2020/8/24～2020/8/27

方法：Google フォーム

結果：10人受講したうち、回答者は7名であった（回答率70%）。授業の後半は対面授業で実施されたこと、授業期間が終わってからのアナウンスとなったため、学生は見落としたと考える。

創作した運動プログラムの動画配信について、5段階評価で満足度を質問した。その結果、回答者全員が最高評価である「5」を選択した。その要因として、「子どもの目線になって考えたつもりだったか、現場の先生が目線で見ると危ないということがわかった」や「グループワークをする中で、自分だけでは思いつかなかった発想を知ることができた」と

いう新しい気づきに対しての感想が多く見られた。

次に授業全体について、5段階評価で満足度を質問した。その結果、回答者全員が最高評価である「5」を選択した。「自分たちが運動しながら子供の頃に知らないスポーツに初めて挑戦するワクワクとドキドキを思い出せてすごく楽しかった」という学生自身が運動遊びを楽しんだことに対する満足感や「指導するには、運動を理解し、リスクに気づけるようにならなければいけないと感じた」等、学びを深める必要性に気づいた様子が見られた。

5. まとめ

大学生の創作した「お家で遊ぼう」をテーマに作成したオリジナル運動遊びプログラムの動画配信を行なった。この取り組みは、学生間で終わる課題とは異なり「子どもたちのために作ろう」という気持ちから、意欲的に取り組むことのできる課題である可能性が示唆された。そして子どもが経験したい「基本的な動き」を運動遊びを考え、お互いの創作した運動プログラムから積極的な意見交換につながる魅力的な課題であると考えた。また、授業内で現場の先生の声聞くことで学習意欲が高まる可能性が示唆された。

6. 担当教員として

大学生の創作した「お家で遊ぼう」をテーマに作成したオリジナル運動遊びプログラムの動画配信を行なった。この取り組みは、学生間で終わる課題とは異なり「子どもたちのために作ろう」という気持ちから、意欲的に取り組むことのできる課題である可能性が示唆された。そして子どもが経験したい「基本的な動き」を取り入れた運動遊びを考え、お互いの創作した運動プログラムから積極的な意見交換につながる魅力的な課題であると考えた。また、授業内で現場の先生の声聞くことで学習意欲が高まる可能性が示唆された。

この授業課題のきっかけはオンライン授業でスタートをすることが決まったとき、学生の学習意欲を守りたい！と考えたことがきっかけであった。そこで「今、コロナの自粛疲れしている子どもたちのために役に立つことをしよう！」と学生に提案したものである。学生自身が行動制限に不便さを感じる中で、子どもたちを想う気持ちから学習課題への積極性は担当教員の想像をはるかに上回り、真剣に取り組む様子が多く見られた。幸いにも、授業の後半で感染対策を取る中での対面授業を行うことは認められ、より活発な意見交換を行うこと、そしてグループワークやお互いの考えた遊びの実践をすることができたことは、やはりオンライン授業よりも良い学習になったことは言うまでもない。そして、現役の先生方から新しい提案やリスク管理などを様々なご意見をいただくことで、「会ったこともない私たちの創作したプログラムに、こんなに真剣に答えてもらえたことがとても嬉しかった。」という学生の意見が聞かれた。学生は子どもたちを想う気持ちと同様に、現場の先生方に自分たちのことを想って意見をいただいたことに喜びを感じている様子だった。

現在、園庭のない保育園の増加や、遊びの環境の確保の難しさから、子どもたちの身体活動が問題となっている。のびのびと外で遊ぶことができるに越したことはないが、今回の課題から改めて、大人の工夫次第で補う可能性を感じている。また、2020年7月に動画掲載し半年以上経った今でも再生回数は少しずつ伸び続けており、体操クラブの準備運動や、児童施設で実践しているという声をきき、大学の社会貢献活動としての可能性を感じている。しかし、この方法には多くの課題は残る。限られた授業の中で運動プログラムを創作するには他の内容を大幅に削る必要があること、なにより現場の先生の時間を多く拝借してしまうことなど課題は残る。より明確な学習効果を証明し、現場の先生に理解と協力をいただくこと、学生により効率的に質の高い学習を提供し現場に貢献できる動画の創作を目指すことが今後の課題である。

謝辞

忙しいお仕事の合間を縫って、本学学生のために貴重なご意見をいただいた先生方、そして、とりまとめをしてくださった代表の先生に心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

- (1) 文部科学省：幼児期運動指針ガイドブック,2012.
- (2) 文部科学省：幼稚園教育要領,2008.
- (3) 文部科学省：小学校体育（運動領域）まるわかりハンドブック,2011.
- (4) 田中千晶：基礎から学ぶ発育発達のための身体活動-元気な子供を育むための確かな根拠, 杏林書院,2019